

乳がん

乳がんでは、治療に定評のある病院が、その評価を維持、あるいは拡大して、手術数を増やしている。乳がんは女性のがんの中で、もっとも患者数が多く、推定新規患者数はここ数年は5万人を超え、現在なお増加している。そのため、特別な問題がない限りは手術数が増えるのは当然といえるだろう。

そうしたなか、ランキング上位、とくに9位までは、病院全体としての取り組みである「チーム医療」に力を入れて、ことで知られる病院が並び、軒並み3けたの増加を示した。

手術数が大幅に増加している聖路加国際病院をみてみよう。08年版（06年の手術数）から2位となり、5年間で303例も手術数を増やした同院は、中村清吾



聖路加国際病院
プレストセンター長
乳腺外科部長
山内英子医師



埼玉県立がんセンター
乳腺外科部長
武井寛幸医師

キーワードは「チーム医療」 3けた以上の増加を示す病院多数

医師（現・昭和大学病院プレストセンター長）が、05年に「プレストセンター」を開設。乳腺外科、形成外科、腫瘍内科、放射線診断科、緩和ケア科といった専門医と、乳がん看護認定看護師、精神看護専門看護師、がん専門薬剤師、ソーシャルワーカーなどの専門家が集まり、一人の患者を支える「チーム医療」の態勢をいち早く整え、乳がん治療におけるチーム医療の重要性を世に知らしめた。そのあとを引き継ぎ、昨年プレストセンター長に就任した

山内英子医師は、同センターの評価は、外科手術のみではなく総合力で判断された結果だと実感しているという。

「乳がん治療は、がんを取りさえすればいいというものではないと。ほかのがんに比べて生存率が高いものの、長期間診ていかなければいけないこと、ほかのがんより若い患者さんが多いことなどから、身体的、社会的、精神的に、いろいろな問題に直面します。当病院では、患者さんが「患者らしく」「ではなく」「自分らしく」生きていけるように、多方面から支えていくためのスペシャリストが常駐しています」（山内医師）

また、同センターは35歳以下の若い患者が多いとい

研修医の不足が 手術数減の原因

このほか、ランキング上位の病院の多くは治験を実施しているため、国内未承認薬を試せる可能性があるなどの特色がある。チーム医療を確立したうえでさらに、その病院ならではの特長をもつ病院が、乳がん患者に支持されているといえる。

手術数の減り方が目立つのは、埼玉県立がんセンターだ。乳腺外科部長の武井寛幸医師に理由を聞いた。

「非常勤やレジデント（後期研修医）を含めた乳腺外科医の数が少なくなり、手術を含めた全体の受け入れ態勢が整わなかったことが原因です。初診から診断までを外科医が担当しますので、外来患者数が制限されてしまいました。今年4月から常勤医師5人、レジデント1人になり、態勢がようやく整いました」

地方では、手術数の多い有名病院でも研修医不足を訴えるところは多く、社会問題となっている。また、麻酔科医の不足傾向も一つの理由だと武井医師はいう。これも研修医不足同様、構造的な問題だ。

さらには、人気や実績のある病院では乳がんのみならず、他疾患の手術数が増えているため、手術室不足も影響する。受診、入院予定の病院が、手術数を減らしたことが気になる場合は、これらの点について調べてみるといいだろう。

ところで、乳がん手術は、2〜3人の医師で実施する

乳がん手術数の増減

[illegible]

表の見方

「いい病院2011」の全国データ（上位40病院）をもとに、その病院の過去5年間の手術数の推移を示した。丸数字は各年での順位、矢印は前年からの増減。「－」は未回答、もしくはランク外など（05、06年は40位以下のデータはない）。参考として、各年の上位40病院の手術総数も示した。

「3人が理想ですが、どの病院でも、現実的には2人でせざるを得ないことが多いのです。乳がんは体表近くが対象です。たとえばわきの下のリンパ節を切除するときには、皮膚や筋肉などを引っ張るために人手が必要で、手術中にリンパ節や乳腺を病理診断に出したり、手術後にそれらを処理したりすること、すべて外科医の仕事です。こうした理由から、できる限り3人で実施するようにしています」(武井医師) ライター・石井悦子

※1 旧国立がんセンター中央病院 ※2 2006/2009の比較
※3 旧国立がんセンター東病院 ※4 旧都立府中病院